

地中熱の活用法探る

岐阜市でNPOがシンポ



農業分野の事例紹介

地下水の熱エネルギー資源としての可能性を探る「地下水・地下熱資源強化活用シンポジウム岐阜大会」が岐阜市橋本町のじゅうろくプラザで開かれ、約220人が参加した。信州大(長野市)に本部のあるNPO法人地下水・地下熱資源強化活用研究会が主催。豊富な地下水に恵まれた岐阜、西濃の両圏域に適した再生可能エネルギーとして地中熱の利用促進を呼び掛けて

地中熱の利用促進について考えたシンポジウム
岐阜市橋本町、じゅうろくプラザ

いるNPO法人地中熱&地下水資源活用NET(岐阜市、香田明彦理事長)が共催した。テーマは「地下水の熱利用がひらく近未来農業」。年間を通じてほぼ一定温度を保つ地中や地下水を、熱交換により空調の省エネなどに生かすのが「地中熱の利用」。工場などでの利用は進むが、農業分野で浸透しておらず主題として選んだ。

事例紹介では、同研究会理事長の藤縄克之信州大教授が安曇野で実験している地中熱を利用したハウスでのイチゴ栽培を説明。トマトやカラーピーマンの栽培での活用事例も紹介された。そのほか地下熱を空調などに利用している岐阜市の複

合施設「みんなの森ぎふメディアコスモス」についても紹介した。今後地中熱の活用を呼び掛けたい」と話し、同NETの香田理事長は「地下水が豊富」と。(古家政徳)